



アイスランド語における無声歯茎ふるえ音の音韻論的位置付け

その他（別言語等）のタイトル	Phonological Interpretation of the Voiceless Alveolar Trill in Icelandic
著者	三村 竜之
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	65
ページ	59-66
発行年	2016-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10258/00008603

アイスランド語における無声歯茎ふるえ音の音韻論的位置付け

その他（別言語等）のタイトル	Phonological Interpretation of the Voiceless Alveolar Trill in Icelandic
著者	三村 竜之
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	65
ページ	59-66
発行年	2016-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10258/00008603

アイスランド語における無声歯茎ふるえ音の 音韻論的位置付け

三村 竜之*¹

Phonological Interpretation of the Voiceless Alveolar Trill in Icelandic

Tatsuyuki MIMURA*¹

(原稿受付日 平成 27 年 6 月 26 日 論文受理日 平成 28 年 2 月 2 日)

Abstract

Icelandic has the voiceless alveolar trill. The voiceless alveolar trill has traditionally been analyzed as a realization of /hr/ sequence, and within a recent framework based on the modern distinctive feature theory, the trill may be analyzed as the devoicing of /r/ which is triggered by the feature [+spread glottis] of the following segment. However, both of these two previous analyses have several deficiencies in their data and argumentation. On critical examination of the previous studies and based on the data of compounds and phrase/sentences, which both of the previous analyses failed to take into consideration, this paper shall draw the following three conclusions: i) besides /r/, the voiceless alveolar trill is a phoneme in Icelandic; ii) the voiceless trill in the word-initial and -medial position are both phonemic; iii) the voiceless trill in the word-final position is the realization of /r/ which is devoiced at the utterance-final position.

Keywords : minimal pairs, phonemic alternations, compounds, sentences, utterance-final devoicing

1 はじめに

1.1 本研究の背景と目的

アイスランド語の鳴音(sonorants)には鼻音、側面音、ふるえ音があり、これらには全て調音位置並びに調音様式が同一である無声音も存在する。具体例を示す*²:

- (1) a. *fimmti* [fímti] 「五番目の」
 b. *hneta* [nétta] 「ナッツ」
 c. *banki* [báŋki] 「銀行」
 d. *stelpa* [stélpá] 「女の子」
 e. *mars* [márs] 「三月」

これまで、特に無声鼻音に関しては Jessen and Pétursson (1998)⁽¹⁾や Pétursson (1973)⁽²⁾など盛んに議論がなされてきたが、無声側面音や無声歯茎ふるえ音に関しては先行研究が著しく乏しく、殊に後者に関しては音韻論的な論及は皆無に等しい。また、管見に及ぶ範囲で無声歯茎ふるえ音に関する論及もわずかに確認されるものの、いずれもデータや論証に多くの不備を残している。

そこで本稿では、実地調査を通じて得られた一次資料に基づき先行研究の不備や問題点を解消するとともに、先行研究が見落としていた複合語や文(句)における無声歯茎ふるえ音の振る舞いを

表記を持っている。但し、accent aigu と accent grave を主強勢と副次強勢の記号として使用するなど、便宜的に IPA の正用法とは異なる表記法を採用している点に留意されたい。

*1 室蘭工業大学 ひと文化系領域

*2 資料の音声表記には国際音声字母(IPA)による簡略

精査し、より包括的で且つより優れた無声歯茎ふるえ音の音韻論的な解釈を提案する。

1.2 アイスランド語について

アイスランド語はアイスランド共和国^{*3}の公用語である。印欧語族のゲルマン語派に属し、デンマーク語やノルウェー語などと共に北ゲルマン諸語（ノルド諸語）を形成する。その他のノルド諸語に比して古語の姿を色濃く残しており、未だ形態論や統語論が複雑な点で特異である。

音韻論的には、無論、英語やドイツ語などには立てられない音素が立てられ得るものの、音素配列の傾向性や音節量の制約（例：短母音開音節(CV)は強勢を担い得ない）など、その他のゲルマン諸語に通ずる性格を有する。

また、強勢を伴う閉音節における母音量（母音の長短）と音節末子音の数の間に見られる相補的な関係や制約（例：VCC/V:C; *V:CC）など、（デンマーク語を除く）ノルド諸語に特有の特徴も保持している。

その一方で、アイスランド語に固有ではないものの、ゲルマン語ではごく一部の方言にのみ観察される「前気音 preaspiration」（本稿では [ʰ] にて標記する；例：vatn [váʰ(t)tʰ] 「水」）を有する。また本研究の主題である無声の鳴音も多いためか、全体的に無声摩擦音が豊富であるかのような聴覚印象を与える点も特徴的と言える。さらに、アイスランドの語の閉鎖音（両唇音・歯茎音・軟口蓋音の三系統）は、「声 voice」の有無ではなく「気音 aspiration」の有無で区別される点も特徴的である。

1.3 調査・インフォーマント

本稿で引用する資料は、全て、筆者が母語話者一名^{*4}をインフォーマントとして行った実地調査（2014年8-9月、2015年3月；首都 Reykjavík にて）を通じて採取した一次資料である。資料の採取方法にはいわゆる「調査票読み上げ形式」を採

用した。調査票には後述する先行研究において引用されている語例も全て項目として盛り込んだ。実際の調査では、調査票に記載した項目のほか、調査項目の発音や意味に関連する事項の追加並びに確認も併せて行った。なお、調査者である筆者とインフォーマントが最も効率よく相互の意思の疎通を図ることが可能である言語がデンマーク語であるため、調査を実施する際の媒介言語にもデンマーク語を使用した。

2 資料

筆者の採取した資料から無声歯茎ふるえ音の具体例を以下に示す。なお、全て引用形 (citation forms) での発音である^{*5*6}。

(2) a. 語頭

hraði [rá:ðɪ] 「速度」

hrár [ráʊ̯r] 「生の」

hring [ríŋk] 「輪 INFL..」

b. 語中・語末

(i) *harpa* [háɪpa] 「ハーブ」

svart [sváɪt] 「黒い INFL..」

björk [bjóɪk] 「樺」

(ii) *mars* [máɪs] 「三月、火星」

fersk [féɪsk] 「新鮮な INFL..」

þorskur [θóɪskʉ] 「鱈」

(iii) *hár* [háʊ̯r] 「髪」

hrár [ráʊ̯r] 「生の」

(2b.iii)に示した語例は、無声歯茎ふるえ音が語末に現れながらも、(2b.i)や(2b.ii)に示した語とは異なり子音連結を成してはいない、いわゆる「絶対語末 absolutely final」の位置の事例である。

して尽力して下さった Guðmundsdótti 氏にこの場をお借りして心より御礼を申し上げます。

*5 アイスランド語の正書法では母音字にアクセント記号(accent aigu)を付すことがあるが、音韻論的な意味でのアクセントの所在を表しているわけではない点にくれぐれも留意されたい。

*6 各語例の日本語訳に付した INFL. は当該語例が変化形であることを示す。アイスランド語は屈折変化の豊富な言語であり、本稿においても屈折形をた数引用しているが、屈折形の詳細（名詞であれば性・数・格、動詞であれば人称・時制など）を明記すると却って煩雑となる嫌いがあるため、一律 INFL.を付して表すこととする。

*3 人口約 33 万人(2015 年 1 月；出展: Hagstofa Íslands (<http://www.hagstofa.is/>); 2015 年 5 月 18 日閲覧)。

*4 インフォーマントは Auður Guðmundsdótti 氏。女性。1955 年 Reykjavík 市の生まれ。Reykjavík にて生育。日本の小、中学校に相当する grunnskóli にてアイスランド語とデンマーク語の教師として教鞭を執る。母語であるアイスランド語のほか、デンマーク語と英語の高い運用能力を有する。インフォーマントと

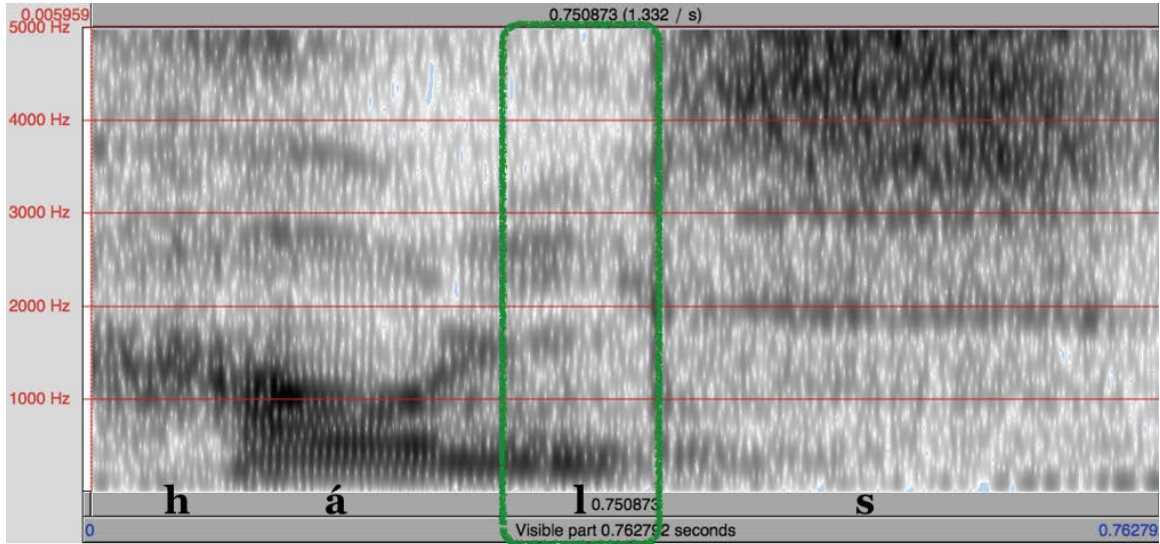


図 1: *háls* のスペクトログラム

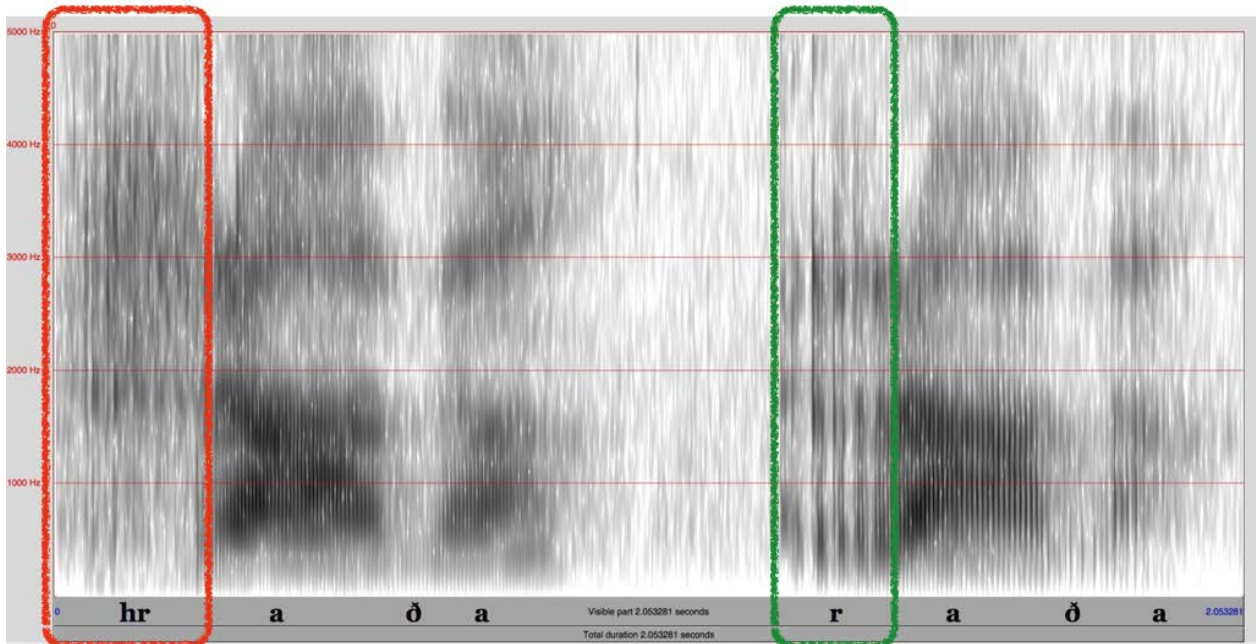


図 2: *hraða* と *raða* のスペクトログラム

なお、(2b.ii)に示した語例から明らかであるが、無声歯茎ふるえ音は無声摩擦音[s]の直前に現れ得る点に注意されたい。既に Rögnvaldsson (2013)⁽³⁾も指摘しているが、筆者の調査資料からも、無声歯茎ふるえ音を除く鳴音のいずれも、[s]の直前に無声音として現れることはない。ここでは、筆者の資料より側面音の具体例を引く（併せて図 1 も参照されたい）：

(3) *háls* [háʊls] *[háʊls] 「首」

また、語頭であり且つ母音に直接先行する位置

では、以下に示すような無声歯茎ふるえ音と有声歯茎ふるえ音の最小対も確認されている（併せて図 2 も参照されたい）：

- (4) a. *hraða* [rá:ða] 「急ぐ」
 – *raða* [rá:ða] 「配列する」
- b. *mörk* [móer̥k] 「印 INFL.」
 – *mörg* [móer̥k] 「多い INFL.」
- c. *marka* [már̥ka] 「印をつける」
 – *marga* [már̥ka] 「多い INFL.」

なお、語末で且つ母音に直接後続する位置（絶対

語末の位置)では、無声歯茎ふるえ音と有声歯茎ふるえ音の最小対は確認されていない*7。

3 先行研究とその問題点

冒頭で言及した通り、アイスランド語における無声歯茎ふるえ音の音韻論的・音素論的位置付けに関する論及は著しく乏しい。管見に及ぶ範囲では無声歯茎ふるえ音それ自体を独立した音素として立てる論及は皆無に等しく*8、i) 子音連続 /hr/ の実現形とする立場か、ii) 後続子音による無声化と解釈する立場の二つのみである。本節では、前者の代表として Haugen (1958)⁽⁶⁾を、後者の代表として Rögnvaldsson (2013)⁽³⁾を取り上げて、それぞれ批判的に検証する。

3.1 音素連続/hr/とする解釈: Haugen (1958)

アイスランド語における無声歯茎ふるえ音の音韻論に言及した唯一の研究とも言える Haugen (1958: 60)⁽⁶⁾は、下記の二点を論拠として、語頭における無声歯茎ふるえ音を子音連結/hr/として解釈する: i) 語頭における子音連続 /pr-, tr-, kr-/ との分布上の体系的な均斉; ii) 語頭における無声歯茎ふるえ音が hr-で綴られる。

アイスランド語において/h/と/r/は既に設定することが可能である音素であるため、既存の音素を組み合わせたほうが新たに無声歯茎ふるえ音を音素として設定するよりも経済的であるという点では優れているといえよう。しかしながら、筆者は、以下の五つの点において問題点を残すと考える。

まず第一に、hr-という綴りを論拠の一部としているが、音韻論としての説明力が著しく乏しい。第二に、子音連結 /hr/ 全体が無声歯茎ふるえ音と

*7 音節頭子音で子音連結を形成する際にも最小対は存在し得ると推定されるが、そのような語例は現時点では筆者の資料では確認されていない。

*8 筆者の把握している限りでは、Malone (1952)⁽⁴⁾が無声歯茎ふるえ音それ自体を独立した音素として認める(と読み取ることが可能である)唯一の研究である。しかしながら、論拠は全く明確にされておらず、従って、ここでは先行研究として取り上げない。また、例えば Árnason (2005: 1562)⁽⁵⁾のように音韻論的な位置付けを明確にせぬまま無声歯茎ふるえ音の記号をスラッシュと共に(いわば、音素として認めているかのごとく)使用している研究者も多数いるが、同様に本研究では先行研究としては扱わない。

して実現するのか、あるいは /h/ により /r/ が無声化するのか解釈の核心が不明確である。第三に、仮に /h/ による /r/ の無声化と解釈するならば、表層の実現形に至る過程において/h/を削除する規則が別途必要となり、経済性 (economy) の反面、全体的な説明が複雑となる。第四に、語中や語末における無声歯茎ふるえ音に関する論及が皆無である。最後に、仮に語頭と同様に語中や語末の無声歯茎ふるえ音を /hr/ と解釈すると、アイスランド語において不適格な構造の音節を許容することとなる。例えば (2b.ii)に例として引いた *fersk* は語音のレベルでは[CVCCC]という構造をとるが、仮に無声歯茎ふるえ音を/hr/と解釈すると、音素のレベルでは/CVCCCC/という構造であると分析される。注意すべきは、アイスランド語では強勢を担う音節は短母音を核(nucleus)とする場合は、音節末子音(coda)は最大三つまでという制約が存在する点である。従って、Haugen の解釈では *fersk* は音節量の制約に違反することになり、アイスランド語における音韻論内部での整合性に支障をきたすこととなる。

以上から、筆者は、無声歯茎ふるえ音を/hr/と解釈する Haugen の解釈は容認できない。

3.2 弁別素性[+/-spread glottis]による無声化: Rögnvaldsson (2013)

アイスランド語における無声歯茎ふるえ音の音韻論を直接論じた研究ではないが、無声鼻音と無声側面音を前気音と関連付けた統一的な解釈を試みる従来の論考に倣えば、無声歯茎ふるえ音を後続子音が有する弁別素性‘spread glottis’ (cf. Halle and Stevens (1971)⁽⁷⁾; 以下[+/-sg]とする)によって引き起こされた無声化として解釈ができそうである。以下、Rögnvaldsson (2013: 94)⁽³⁾を代表例として取り上げ、批判的に検討を行う。

既に 1.2 節において言及した通り、アイスランド語の閉鎖音は気音の有無で対立しており、従来の弁別素性理論 (distinctive feature theory) の枠組みでは有気音は[+sg]、無気音は[-sg]と解釈することができる。この枠組みに基づくと、例えば(2)で例に引いた *mörk* 「印 INFL.」における無声歯茎ふるえ音は、後続する閉鎖音[k]が音素(基底表示)としては有気音/k^h/であり、その弁別素性[+sg]により引き起こされた/r/の無声化として説明することができる。同様に、*mörg* 「多い INFL.」において無声ではなく有声の歯茎ふるえ音[r]が現れているのは、後続する破裂音[k]が音素としては[-sg]である/k/の

ため無声化が引き起こされていないからである、と説明することができる*9。

しかしながら筆者は、この解釈は以下に述べる二つの問題点を孕んでいると考える。まず第一に、[+sg]による無声化では説明のできない反例が存在する。既に第2節にて例に引いた *mars* 「三月、火星」や *fersk* 「新鮮な INFL.」などから明らかであるが、無声歯茎ふるえ音は摩擦音/s/の直前に現れうる。しかしながら、例えば Thráinsson (1978)⁽⁸⁾も指摘するように、/s/は[-sg]である。そもそも[+sg]である分節音は“with the vocal folds drawn apart to allow a ‘breathy’ articulation”や‘a longer VOT’といった特性を有するが (cf. Spencer (1996: 143)⁽⁹⁾)、このような音声特性を欠く/s/には直前に立つ/r/の無声化を引き起こし得ないはずである。

第二に、[+sg]による無声化の解釈を成立させるためには、/r/は常に子音が直接後続することが前提となるが、この条件を満たさずとも無声歯茎ふるえ音が現れる語例は多数存在し、全て[+sg]による無声化の解釈の反例となる。例えば、(2a)に例として引いた *hraði* 「速度」や *hár* 「髪」における無声歯茎ふるえ音のように、母音に直接先行する場合やそもそも子音が後続しない場合は、[+sg]による無声化という解釈は成立し得ない。

ある特定の環境における無声歯茎ふるえ音に関しては説明が可能ではあるものの、その他の環境における無声歯茎ふるえ音については説明することができず、従って、弁別素性[+/-sg]に基づく解釈は極めて説明力が乏しいと言わざるを得ない。

4 筆者の解釈

前節にて論じたように、先行研究はある特定の環境や条件下における無声歯茎ふるえ音の説明は可能であるものの、アイスランド語における無声歯茎ふるえ音の全体像を捉えるには未だ至っていない。その要因としては、先行研究では語、とりわけ単純語における無声歯茎ふるえ音にのみ着

*9 音声 (表層) のレベルでは無気音である *mörk* の [k] をなぜ音素 (基底) のレベルにおいて有気音/k^h/と分析するのか疑問が残る。この点を明確に論じた研究は管見に及ぶ範囲では皆無であるが、筆者が推察するに、有気音が後続しながらも鳴音に無声化の生じない方言形 (cf. Thráinsson (1978)⁽⁸⁾) をも扱い得る統一的な理論の構築が、*mörk* の無気音[k]を/k^h/と解する積極的な動機となっているのではないか。

目していたことが挙げられる。

そこで筆者は、先行研究に欠けていた複合語や文など、単純語よりも大きな単位における無声歯茎ふるえ音の振る舞いを精査し、以下の解釈を提案する:

- (5) a. 音素/r/とは別に無声歯茎ふるえ音 (便宜的に /r0/ とする) を独立の音素として設定する。
- b. 語頭並びに語中における無声歯茎ふるえ音は音素/r0/が実現したものである。
- c. 語末 (絶対語末) における無声歯茎ふるえ音は、(語末ではなく) 発話末尾における/r/の無声化したものである。

論拠は以下の三つ: i) 語頭並びに語中において [r] と無声歯茎ふるえ音の対立する最小対が存在する; ii) 語末 (形態素末) における [r] と無声歯茎ふるえ音の交替現象; iii) 発話末尾にかけての調音エネルギーの減衰。次節にてそれぞれの論拠について詳しく論じていく。

4.1 論拠 1: 最小対の存在

語頭 (で且つ母音に直接先行する場合) 並びに語中では、無声歯茎ふるえ音は[r]と対立し、既に(2)に示したように最小対が存在する:

- (6) a. *hraða* [rá:ða] 「急ぐ」
– *raða* [rá:ða] 「配列する」
- b. *mörk* [mórk] 「印 INFL.」
– *mörg* [mórk] 「多い INFL.」
- c. *marka* [márka] 「印をつける」
– *marga* [márka] 「多い INFL.」

以上から、アイスランド語では音素/r/とは別に音素/r0/を設定することが可能であると結論づけることができる。

4.2 論拠 2: 語末 (形態素末) における交替現象

前節では語頭並びに語中の無声歯茎ふるえ音が独立した音素として位置付けられうることを主張したが、では語末における無声歯茎ふるえ音はいかに位置付けられるであろうか。語末では前述したような最小対は確認されていないが、先行研究が視野に入れていなかった複合語や文、句における無声歯茎ふるえ音の振る舞いを精査した結果、語末に立つ無声歯茎ふるえ音は[r]と交替しうるということが明らかとなった。

まず複合語の具体例を以下に示す:

- (7) a. *hár* [háʀ] 「髪」 (*hár-* [háʀ-]~[háʀ-])
 e.g. *hárþurrka* [háʀθʉr(ʀ)ka] 「ヘアドライヤー」
 (< *hár* + *þurrka* [θʉr(ʀ)ka] 「ドライヤー」)
 cf. *hárnál* [háʀnàʀ] 「ヘアピン」
 (< *hár* + *nál* [nàʀ] 「針」)
- b. *yfir* [í:ʋiʀ] 「-の上に」 (*yfir-* [í:ʋiʀ-]~[í:ʋiʀ-])
 e.g. *yfirtaka* [í:ʋiʀtʰá:ka] 「引き継ぐ」
 (< *yfir* + *taka* [tʰá:ka] 「取る」)
 cf. *yfirlæknir* [í:ʋiʀlækniʀ] 「医長」
 (< *yfir* + *læknir* [lækniʀ] 「医者」)

(7a) の *hár* を例にとると、複合語 *hárþurrka* の前部要素として用い、無声化を引き起こしうるであろう音 (*þurrka* の初頭の音) が後続する場合は、*hár-* の末尾の *r* は単独形と同じく無声の歯茎ふるえ音として現れているが、一方、無声化を引き起こし得ない音 (*nál* の初頭の音) が直接後続する場合は、*r* は有声音である[r]として現れている。また(7b)の *yfir* の末尾の *r* も同様に、無声化を引き起こしうる音 (*taka* の初頭の音) が後続する場合は無声歯茎ふるえ音で現れているが、無声化を引き起こし得ない音 (*læknir* の初頭の音) が後続する場合は[r]で現れている。

(7)に示したような語末における無声歯茎ふるえ音と[r]の交替現象は、文や句においても観察される。具体例を以下に示す:

- (8) *stór* [stóʀ]~[stóʀ] 「大きな」
 e.g. *Magnú er stór* [stóʀ] *maður* [má:ðʉr].
Magnús be large/great man
 「Magnús【人名】は背の高い/偉大な男性です。」
 cf. *Hallgrímskirkja er stór* [stóʀ] *kirkja* [kʰiʀkʰa].
Hallgrímskirkja be large church
 「Hallgrímskirkja【固有名詞】は大きな教会です。」

複合語における *hár-* や *yfir-* と同様、*stór* の語末の *r* も無声化を引き起こし得ない音 (*maður* の初頭の音) が後続する場合は有声音である[r]で現れているが、無声化を引き起こし得る音 (*kirkja* の初頭の音) が後続する場合は無声歯茎ふるえ音として現れている。

なお、前節にて既に音素/r0/の実現形として位置付けた語頭における無声歯茎ふるえ音は、仮に有声音が先行しても一貫して無声音のままである点

に注意されたい:

- (9) *hring* [rɪŋk] 「輪 INFL.」 (-*hring* [-rɪŋk]; *[rɪŋk])
 e.g. *giftingahring* [giftɪŋkariŋk] 「結婚指輪 INFL.」
 (< *gifting* [giftɪŋk] 「結婚」 + *hring*)

以上から、無声歯茎ふるえ音は語頭と語末ではその音韻論的な性質が大きく異なり、後者の場合に比して前者の場合は音韻論的な自律性が高い(換言すれば、それ自体を音素として認定することが可能である)ことが明らかとなる。では、改めて語末における無声歯茎ふるえ音は音韻論的にどのように捉えるべきであろうか。

4.3 論拠 3 発話末尾における無声化

第 4.2 節にて示したように、語末(母音に直接後続し、且つ子音連結を形成しない場合)における無声歯茎ふるえ音は後続子音の性質によっては有声音である[r]と交替し得ることが明らかとなったが、(1)において例に引いた引用形の音形からも明らかのように、休止 (pause) が後続するいわゆる絶対語末の位置においては一貫して無声歯茎ふるえ音のみが現れている。

このような語末における無声歯茎ふるえ音の振る舞いを合理的に説明するべく、筆者は語末の無声歯茎ふるえ音を音素/r/の実現形として解釈する。第 4.2 節において示した交替現象は音声環境に規定された現象であり、例えば(7b)で例に引いた *yfirtaka* における *yfir-* の末尾の無声歯茎ふるえ音は、後続子音である[tʰ]によって引き起こされた無声化として純粋に音声学的な説明が可能である。

同様に、絶対語末の位置における無声歯茎ふるえ音も音声学的に説明が可能な無声化現象であると筆者は考える。周知の通り、有声音は生体の振動(開閉運動)を伴う音であり、その振動の原動力となる呼気流を発生させるためには一定のエネルギーが必要となる。しかしながら、調音に費やすエネルギーは発話の開始部に比して発話の末尾にかけて漸次的に減衰するのが一般的である。そこで、語 (word/lexicon) と発話のレベルを分け、引用形で発音した語も独立した一つの発話を成すと捉えると、語末にも同種の調音エネルギーの減衰が生じていると考えることができる。つまり、**これまで語末と捉えてきた位置を発話末尾と捉え直すことにより**、語末における無声歯茎ふる

え音の持つ「無声性 voicelessness」が自身の固有の特性ではなく、発話末尾における調音エネルギーの減衰によって引き起こされた声帯振動の停止、換言すれば「後語彙的 (postlexical)」に導かれた無声化として解釈することが可能となる。

* * *

これまで論じてきた筆者の解釈に基づき(1)に示した語例を音素分析すると、下記の通りとなる(紙幅の都合上、語義は割愛する; なお、長母音と二重母音の表記に関しては暫定案である点に注意されたい) :

- (10) a. 語頭 *hraði* [r̥á:ðɪ] /r̥a:ðɪ/, *hrár* [r̥á:ʀ] /r̥a:ʀ/,
hring [r̥íŋk] /r̥ɪŋk/
 b. 語中・語末
 (i) *harpa* [há:ɾpa] /harpa/, *svart* [svá:ɾt] /sva:ɾt/,
björk [bʲjœ:ɾk] /bjœ:ɾk/
 (ii) *mars* [má:ɾs] /mars/, *fersk* [fé:ɾsk] /fe:ɾsk/,
þorskur [θó:ɾskur] /θo:ɾskur/
 (iii) *hár* [há:ʀ] /ha:ʀ/, *hrár* [r̥á:ʀ] /r̥a:ʀ/

5 結語

以上、本稿では、アイスランド語における無声歯茎ふるえ音の音韻論的位置付けに関して、先行研究の批判的検証を通じて、筆者独自の解釈案を論じてきた。

本稿における議論と結論を要約すると以下の通り:

- (11) a. 先行研究とその問題点:
 i) 語頭(母音に直接先行する場合)における無声歯茎ふるえ音を /hr/ と分析; 語中並びに語末における無声歯茎ふるえ音に関しては論及なし; 綴り字 *hr-* を論拠としており説明力に乏しい; 音節量制約に違反する音節 (*VCCCC) を生み出してしまふ。
 ii) 無声無気閉鎖音(基底では有気音と推定)に直接先行する無声歯茎ふるえ音を、後続子音が有する弁別素性 [+spread glottis] により引き起こされた無声化と解釈; その他の環境における無声歯茎ふるえ音に関しては論及なし; 反例の存在: [-spread glottis] である

[s] の直前に無声歯茎ふるえ音が現れる; 母音に直接先行する場合並びに絶対語末の場合のように、後続子音が存在しない環境では解釈が成立しない。

b. 筆者の解釈:

- i) 最小対の存在を論拠として、無声歯茎ふるえ音を独立した音素として設定; 語頭並びに語中の無声歯茎ふるえ音は音素のレベルでも無声歯茎ふるえ音であると分析。
 ii) 複合語や文、句における語末(形態素末)における無声歯茎ふるえ音と [r] の交替現象が音声学的に規定されている事実を論拠に、この位置に立つ無声歯茎ふるえ音の音韻論的な自律性の低さを指摘。
 iii) 語と発話のレベル分けを提案; 絶対語末の位置に立つ無声歯茎ふるえ音は発話末尾における /r/ の無声化として解釈。

先行研究は特定の環境における無声歯茎ふるえ音のみを対象としており、アイスランド語における無声歯茎ふるえ音の全体像を捉え切るには至っていなかった。それに対し筆者の解釈は、複合語や文、句も含めて無声歯茎ふるえ音の振る舞いを過不足なく説明することが可能であり、この点でより優れていると言えよう。

冒頭で触れたようにアイスランド語の無声鼻音や無声側面音に関する先行研究は比較的豊富ではあるものの、本稿で指摘したような論考や資料における不備や問題点を同じく孕んでおり、またいずれも断片的な論考にとどまっている。今後は、本稿において提案した解釈を他の無声鳴音の解釈にも応用し、有声音も含めたアイスランド語における鳴音の全体像の解明を試みたい。

謝辞

本稿は、日本言語学会第150回大会(2015年6月20日、大東文化大学板橋キャンパス)における口頭発表並びに予稿集原稿⁽¹⁰⁾の内容に基に、聴衆諸氏からいただいた助言を踏まえて加筆及び修正を加えたものである。貴重なコメントを下さった上野善道先生(東京大学名誉教授)、Timothy Vance先生(国立国語研究所)、清水克正先生(名古屋学院大学名誉教授)にこの場をお借りして御礼を申し上げます。

また、本稿に対して有益な助言を下さった二名の査読者にもこの場をお借りして御礼を申し上げます。

文献

- (1) Jessen, M. and M. Pétursson, Voiceless nasal phonemes in Icelandic, *Journal of International Phonetic Association* Vol.28 (1998), p198-212.
- (2) Pétursson, M., Phonologie des consonnes nasales en islandais moderne, *La Linguistique: revue internationale de linguistique générale* Vol.9 (1973), p115-138.
- (3) Rögnvaldsson, E., *Hljóðkerfi og orðhjutakerfi íslensku*, Málvísindasofnun Háskóla Íslands (2013).
- (4) Malone, K., The phonemes of modern Icelandic, *Studies in Honor of Albert Morey Sturtevant*, University of Kansas Press (1952), p5-21.
- (5) Árnason, K., The standard language and their systems in the 20th century I: Icelandic, Eds., Oskar Bandle et al, *The Nordic Languages: An International Handbook of the History of the North Germanic Languages* Vol.2, Walter de Gruyter (2005), p1560-1773.
- (6) Haugen, E., The phonemics of modern Icelandic, *Language* Vol.34 (1958), p55-88.
- (7) Halle, M. and K. N. Stevens, A note on laryngeal features, *Quarterly Progress Report, MIT Research Laboratory of Electronics* Vol.101 (1971), p198-212.
- (8) Thráinsson, H., Dialectal variation in Icelandic as evidence for aspiration theories, *The Nordic Languages and Modern Linguistics 3: Proceedings of the Third International Conference of Nordic and General Linguistics* Vol.3 (1978), p533-544.
- (9) Spencer, A., *Phonology: Theory and Description*, Blackwell (1996).
- (10) 三村竜之, アイスランド語における無声歯茎ふるえ音の解釈について, *日本語学会第 150 回大会予稿集* (2015), p284-289.